

「エコシティたかつ」推進方針 骨子案

目次

(・前回からの主な修正点等)

1 方針策定にあたって

(1) たかつのまち、地球温暖化について(本資料では割愛)

・第2回会議資料4、及び「キラリたかつ」、「歩きたくなる高津」、基礎調査をもとに現状と課題の整理

(2) 方針の位置づけ(2ページ～)

・方針の位置づけを整理

(3) 計画対象区域

(4) 計画期間

2 基本理念(4ページ～)

・高津区(川崎市)に関する課題等を中心に表現

3 基本目標(5ページ～)

・ の順番を変更

・タイトルを変更

低炭素社会の実現 低炭素・省資源社会の実現

防災都市づくりの推進 地域に即した防災まちづくりの推進

・具体的な内容を修正

4 基本的な考え方(6ページ～)

・具体的な内容を加筆

・タイトルを変更

戦略 基本的な考え方

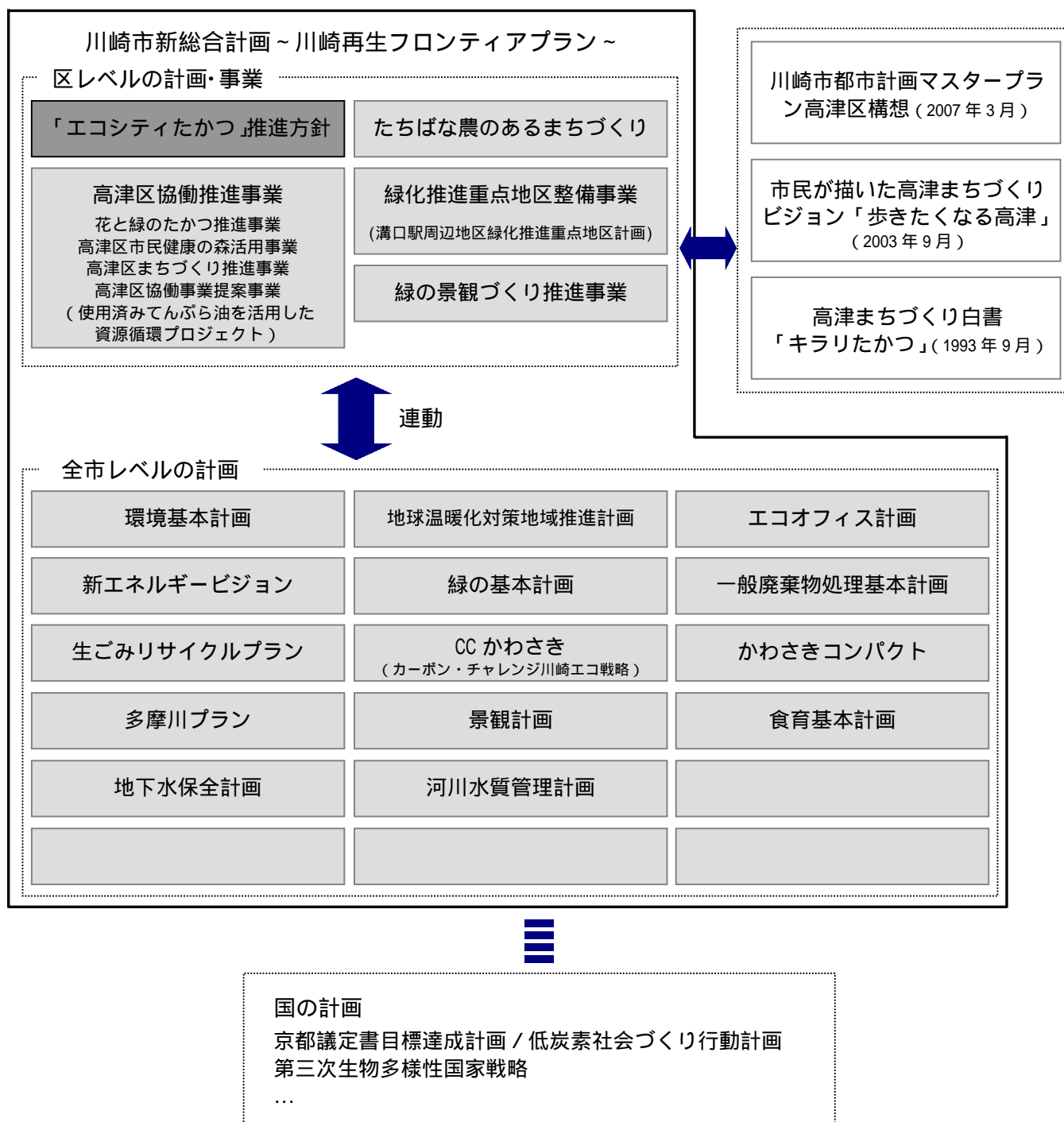
5 アクションプラン(8ページ～)

・基本目標との関連性を で表現

6 推進体制と評価(次回検討事項)

1 方針策定にあたって
(2) 方針の位置づけ

「エコシティたかつ」推進方針は、川崎市新総合計画（川崎再生フロンティアプラン）に基づいた区の実行計画です。新総合計画に含まれる様々な全市レベルの計画と連動し、区レベルの計画・事業と調整し進めます。



【第2回推進会議意見】

- ・行政計画に限定するのか。市民、NPO、企業が行うものを含むのか。どちらかで推進体制は変わってくる。コミュニティレベルで何かやるかということであれば、行政計画ではなく、各主体が自発的に推進プロセス、検証プロセスに関わっていく社会計画になるだろう。
- ・ローカルアジェンダ21を参考にしてはどうか。
- ・県も条例を検討中であるが、市も計画を改訂中、条例化を検討中である。県とは同等かそれを上回るものになると思う。いずれにしても整理されていくので、あまり気にしなくて良い。

(3) 計画対象区域

高津区の全域(17.1km²)及び同一流域界の周辺区域

(4) 計画期間

2009(平成21)年度～2018(平成30)年度

2 基本理念

地球環境危機の時代に対応した、自然の賑わいとともにある持続可能な循環型都市
構造の再生と創造 ~100年後のたかつのまちのために~

私たちが住む地球は大変な環境危機にさらされています。異常気象や局地的豪雨、洪水、絶滅種の増加など、“何かおかしい…”と異変を感じている人は多いのではないのでしょうか。

20世紀半ば以降に観測された世界平均気温の上昇は、人為的なものである可能性が非常に高いと言われています。その原因である二酸化炭素の排出量は、私たちが住む川崎市においても、1990年と比べると4.6%増加し、その多くが産業部門から排出されています。民生部門（家庭系）においても、1990年より37.1%増加しています。

地球温暖化の進行は洪水・土砂災害・渇水などの水災害とともに、生態系、食料生産、健康へも影響を及ぼしています。日本における絶滅危惧種の割合は、種の2割近くにも及んでおり、また、生物多様性の減少が課題となっています。

世界の平均気温は、今世紀末にはさらに2℃上昇することが避けられないとも予測され、被害の大規模化が指摘されています。地球温暖化対策は、緩和策（温室効果ガス排出の削減や吸収策）と適応策（気候変動がもたらす水災害や生物多様性の減少等、悪影響への対応策）の両輪によって進めていかなくてはなりません。

高津区は、南に広がる下末吉台地地域と北側の多摩川方向に開けた平坦地で構成されており、農地や、崖線にそった緑が多く残っており、多摩川や平瀬川、矢上川、二ヶ領用水などの水系にも恵まれています。このような地形・水系・緑の配置をふまえ、温室効果ガス排出の削減吸収策とともに、水災害への対応ならびに生物多様性の保全につとめてゆく必要があります。

そのような中、市民健康の森や二ヶ領用水における取り組みをはじめとする緑や水の保全をめざす活動や、廃食油や落葉・生ごみリサイクルなど、様々な市民活動が行われており、市民や企業など環境に対する意識も高まりを見せています。行政のみでは解決できない課題について、市民、企業、学校、行政の協働によるさらなる対応が期待されています。

以上のような課題・状況そして高津区の特性をふまえ、地球環境危機の時代に対応した、自然の賑わいとともにある持続可能な循環型都市「エコシティたかつ」の創造を目指します。

【第2回推進会議意見】

- ・スケールの乖離がある。世界レベルと区域レベル。その間が抜けている。
- ・一市民、主婦の目線からすると、理念は立派過ぎるように感じる。川崎・ごみ連の私たちが考えていることは生ごみリサイクルであり、橘の農とつなげたい。

3 基本目標

低炭素・省資源社会の実現
 自然共生型都市再生の推進
 地域に即した防災まちづくりの推進

低炭素・省資源社会の実現

市民一人ひとりが、緑のカーテンやまちなか油田プロジェクトなど身近なアクションをおこすことにより、地域（地球）の二酸化炭素の削減につなげ、資源を有効に活用します
 アクションを通じて環境を大切にする心（エコ・マインド）を育み、ライフスタイルの
 変革を促すことで、豊かな市民生活の実現と新たな文化・価値創造を目指します

京都議定書目標達成計画、川崎市地球温暖化対策地域推進計画、カーボン・チャレンジ
 川崎エコ戦略（CC かわさき）など、国や川崎市の計画と連動し、地域から実践します

自然共生型都市再生の推進

水系や流域、丘陵などランドスケープを重視した緑の保全と創造に取り組みます
 農的空間（市街化区域内の生産緑地、市街化調整区域内の農地）を活かした緑豊かなま
 ちづくりを進めます

学校ビオトープの工夫を先導的なアクションとしつつ、第三次生物多様性国家戦略、川
 崎市環境基本計画、緑の基本計画等を踏まえ、生命（いのち）の賑わい豊かな自然共生型
 の都市再生を、地域から推進します

地域に即した防災まちづくりの推進

局地的豪雨や台風の巨大化等による洪水や、湯水の深刻化など、気候変動によって増大
 すると予想される災害に適応しうる流域視野の「水災害適応型都市」づくりを推進します

家庭や学校における雨水貯留・雨水利用・保水のための緑の保全により、流域を意識し
 た治水の実践を足元からつみあげます。

湯水リスクに対応して総合的水資源マネジメントを推進します

【第2回推進会議意見】

・「低炭素社会の実現」の中には3Rが隠れている。これが前面に出てしまうと、全てを集約してしまうのであえて入れていないが、会議で意見が出るのであれば「低炭素・省資源社会の実現」としても良いと思う。

・「低炭素社会の実現」は非常に抽象的である（日本や高津区が、どんなにがんばってもどうしようもない問題である）。それ以上に、適応策（防災や緑の保全）が大切である。

・空間スケールの問題。社会的ジレンマ（地域間の押し付け合い）がおきている。グローバルとローカルはつながっている。高津区20万人は平均的な中規模都市であり、高津区がやることに意味がある。温暖化への対応はローカルなレベルから21世紀型の都市構造を変えていくことである。

・温暖化の災害は水から起こる。「低炭素社会の実現」というだけではもういかない。

・目標の立て方は、区民に分かりやすいと思う。

・3つの基本目標は良くできている。

4 基本的な考え方

環境的・社会的・経済的持続可能性の実現
地域の流域特性に根ざした事業推進
行政・市民・企業・学校の協働による推進
区の全事務事業の環境視点からの見直しと総合的展開
資源の有効活用とリーディングプランによる効果的事業推進

環境的・社会的・経済的持続可能性の実現

環境的持続可能性を実現するためには、同時に、社会的・経済的な視点からの取り組みも必要です。「エコシティたかつ」の推進において、環境的側面を重視しながらも、社会的側面（顔の見える地域のつながりを大切にするなど）や、経済的側面（再生エネルギーの普及より環境技術を産業として広めるなど）を取り入れたアクションプランを推進することにより、持続可能な都市を目指します。

地域の流域特性に根ざした事業推進

高津区には、下末吉台地面、その崖線、台地に刻まれた谷戸群、そして多摩川方向に開かれた低平地の4つの特徴的な地形があり、これらが大小の流域に区分されます。高津の基本的な地形に配慮し、それぞれの流域に根ざした緑地保全や健全な水循環のシステムを構築することは、地球温暖化の適応策として、市民が安全に暮らしていくことのできる水災害に強い都市の基盤づくりとなります。

行政・市民・企業・学校の協働による推進

高津区には、市民健康の森や二ヶ領用水における取り組みをはじめ、廃食油や落葉生ごみリサイクルなど、様々な市民活動が行われています。また、企業でもISOの取り組み等が行われ、学校では環境学習に取り組んでいます。行政、市民グループ、企業、学校が、共通の目標に向かって、それぞれの役割と責任の中で出来ることを進め、連携することで大きな推進力となり、相乗的な事業展開が期待できます。さらに、テーマによっては区内だけではなく、他の地域と連携することが必要です。

区の全事務事業の環境視点からの見直しと総合的展開

協働推進事業をはじめとする高津区の全事業を環境的視点から見直し、「エコシティたかつ」推進方針を分野別施策の融合パレットと捉え、地域諸施策の総合の場として推進します。また、100年後の高津のありようを見据え、長期的な視点に立った制度設計・開発を進めます。

資源の有効活用とリーディングプランによる効果的事業推進

限られた財源や資源をリーディングプランに集中することで、より相乗的、効果的に事

業を推進します。また、区内の環境資源を的確に把握し、適切な資源マネジメントを行います。

【第2回推進会議意見】

- ・こういう所に気をつけてやっていこうという留意事項にしか見えないので、その場合は「戦略」という言葉は使わない方が良い。
- ・「戦略」に何を書き込むか考えると、「方向」(方針)としてはどうか。
- ・高津区らしい、顔の見える戦略をつくった方が良いのでは。
- ・具体の地理的・物理的な流域レベルでの考え方は素晴らしい。
- ・区の資源を集中するのは、実効性の高いところに資源を集中させるべき。
- ・今までつながっていないものをつなげることも大事。実行力の加速度を高める効果がある。失敗してもいいから、取り組みの機能に着目したやり方もあるのではないか。
- ・目標を達成する上で、市内にあるどのような資源を組み合わせることができるか考え、一番効果的な方法を考えていくことが必要である。
- ・地域における多様な資源を下から積み上げていく(個人の庭の緑をつないでいくなど)。実効性の高いアクションプランは、上からと下からの両方で進めていく必要がある。
- ・高津区の地形は、平坦地と丘陵地の分岐点で、それぞれの特徴があり(「高津らしい」)、川崎市全体のモデルとなるのではないだろうか。そのため、高津区での先駆的な計画策定は価値がある。

5 アクションプラン

低炭素・省資源社会の実現
 自然共生型都市再生の推進
 地域に即した防災まちづくりの推進

基本目標			アクションプラン (リーディングプラン)	連携事業や活動	期間
			(1) 学校流域プロジェクト	小・中学校における環境学習等	短期
			(2) 雨水貯留・利用の促進		短期
			(3) 緑のカーテン事業の展開		短期
			(4) 緑化推進重点地区計画事業の推進		短期
			(5) 橘地区の農的資源を活かしたまちづくりの推進	「たちばな農のあるまちづくり」推進事業(高津区)	短期
			(6) 再生可能エネルギーの利用促進		短期
			(7) まちなか油田プロジェクトの推進	かわさきかえるプロジェクト	短期
			(8) 区役所の緑化等、エコシティホール化の推進		短期

低炭素・省資源社会の実現
自然共生型都市再生の推進
地域に即した防災まちづくりの推進

基本目標			アクションプラン (リーディングプラン)	連携事業や活動	期間
			(9) エコエネライフコンクールなど普及啓発イベントの実施	高津区区民会議	短期
			(10) 地図による地域環境資源の共有化の促進	歩こう、知ろう！高津の水と緑・プロジェクト (高津区まちづくり協議会)	短期
			(11) 水の道調査に基づく復元水系図の作成		中期
			(12) 複合型氾濫マップ(ハザードマップ)の協働作成		中期
			(13) 仮称「たかつ地域水循環計画」の策定		中期
			(14) 円筒分水、かすみ堤の保全・活用による「緑のコリドー」の整備	二ヶ領用水ウォッチング・フォーラム	中期
			(15) 生物多様性保全地域モデル計画の作成		中期
			(16) 小さな循環・生ごみリサイクルシステムの構築	パークシティ溝の口農家	中期
			(17) 行政区レベルでの SEA(戦略的環境アセスメント)の実施		中期

低炭素・省資源社会の実現
 自然共生型都市再生の推進
 地域に即した防災まちづくりの推進

基本目標			アクションプラン (リーディングプラン)	連携事業や活動	期間
			(18)ニヶ領用水など区内小河川の再生	ニヶ領用水ウォッチング・フォーラム	長期
			(19)小流域単位の総合治水の推進		長期
			(20)生命地域の視野による都市計画の推進		長期
			(21)自然環境・地域環境に配慮したエコ・コミュニティ単位の自治制度の創出		長期

<アクションプランの一例>

(1) 学校流域プロジェクト

リーディング
プラン

ねらい

学校は、子どもの学習の場であるとともに、子どもの学習活動や創造的な遊びにさまざまなに接することを通して保護者、教員、地域市民が交流し、学校と地域文化が相互に影響を与えあう場でもあります。また、緊急時には、地域の防災の拠点として活用されます。

このような相互の交流の深まりにも期待しつつ、学校を、将来を担う子どもたちが、身近な場所で自然や水循環の仕組み、さらには自然再生の過程を実感する場として、また同時に、健全な水循環のもとに生きものの賑わいを再生し支える地域のモデル基地と位置づけ、各種のビオトープや雨水貯留施設などを計画的に整備し、学習活動、課外活動、地域との交流活動等に活用します。

適切な年度計画のもと、小学校で取り組みを開始し、高津区全ての学校での展開を目指します。また、プロジェクトを進める上で、地域の町内会や、市民グループ、NPO、行政との連携、支援はかせません。財源や人材の育成など基盤整備も同時に進めます。

具体的な内容(例)

ビオトープの創出とモニタリング・管理・活用

学校がある土地や自然、既存の施設などを活かし、ビオトープを創出します。

水のビオトープ ... 雨水利用を工夫した池等

緑のカーテン ... 在来をつる植物

草地のビオトープ... 蝶やバッタが暮らせる在来植物の草地

森のビオトープ ... 蝶や鳥が採餌や巣作りの頼りにできる落葉樹主体の木立
落葉樹の落葉落枝は堆肥や保水土壤づくり等に活用

キャンパスに降った雨の保水の推進

雨を貯留する施設を工夫し、校庭の保水を進めます。

貯留雨水の活用

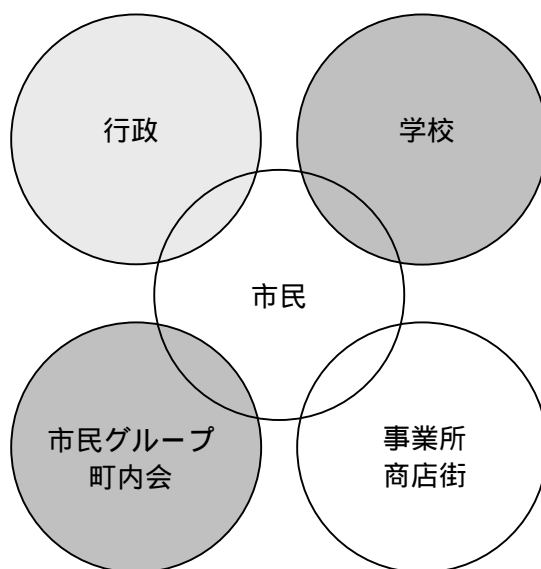
貯留した雨水を、ビオトープや花壇への水まきに利用します。

学習教材としての活用

ビオトープや雨水の利用などを通して、生物や健全な水の循環、学校を含む足元の小流域、それを含むさらに大きな流域・水系について学び、学年をこえた学習教材として活用します。

推進体制

区内の学校を地域の拠点として、学校、地域の町内会や市民グループ、NPO、行政が連携して進めていくものです。



【前タイトル】流域アプローチによる学校ビオトープの計画的整備活用の推進

【第2回推進会議意見】

- ・高津区内 15 校の小学校のうちビオトープがあるのは 2 校。ビオトープを作る時の予算の問題、また管理は専門家が関わらないと無理である。
- ・川崎市内には水田がないため、現状としてバケツで育てるしかない。コンクリートの田んぼは 9 校あるが、地元の人に関わってくれないと維持管理が大変である。
- ・観察池は 11 校あり、ビオトープとあわせ、池がないのは 2 校。屋上緑化は 2 校、緑のカーテンは 5 校、ソーラーパネルは 1 校、雨水利用は新設の学校にあるかもしれない。
- ・学校での環境の学習といえば、社会科の授業で公害対策を中心として行っていた。生活や総合学習の中で、社会、理科の発展的学習が取り組めるのではないか。地域にあった学習の仕方が重要。
- ・是非、学校をモデルとした取り組みを行いたい。NPO が持続的に関わるのが継続のキーだと思う。
- ・学校の先生などに、正しい知識を広められるような機会を増やす必要がある。